

## 大会運営委員会企画シンポジウム

第1日目 (9月17日)

13:45~15:45 L205

### 社会心理学の明日一次世代の挑戦

企画者	日本社会心理学会大会運営委員会	
司会者	宮本 聰介	明治学院大学心理学部
話題提供者	石井 敬子	神戸大学大学院人文学研究科
話題提供者	及川 昌典	同志社大学心理学部
話題提供者	大坪 庸介	神戸大学大学院人文学研究科
話題提供者	熊谷 智博	大妻女子大学文学部
指定討論者	三浦 麻子	関西学院大学文学部

#### 概要

日本社会心理学の歩みも半世紀を超え、歴史と功績を振り返り、将来を展望するさまざまな企画が行われてきた。昨年度の第50回大会のシンポジウムでも、現状からの脱却と新たな社会心理学の展開について活発な議論が行われた。そこでは、研究領域や国や文化の枠を越えて活躍されている研究者に話題提供をしてもらい、社会心理学の現状を反省し、「こころと社会」に関わる本質的研究課題への挑戦について深慮した。本年度の第51回大会でも昨年度の問題意識を引き継ぎ、より若い世代の研究の中に社会心理学の未来を探るシンポジウムを企画した。日本の社会心理学界の中で、まだ広くは知られていないとしても、今後大きな潮流となるかもしれない挑戦を開始されている研究者の方に話題提供をしていただき、社会心理学研究の未来と可能性について大いに議論したいと考えている。

今回は4人の社会心理学者にご登壇いただけたことになった。話題提供の順番は大会のときのお楽しみにさせていただきたいが、ひとまず名前のあいうえお順に話題の概略を紹介させていただく。

石井先生は、人の心の性質と文化は相互構成的であるとする文化心理学の立場から、特に認知や知覚に注目した比較文化研究による知見を紹介していただき、神経科学や発達研究への接近を含めた今後の展望について論じていただく。及川先生は、高次認知過程における意識と無意識の役割を扱う自動性研究の研究パラダイムを概観し、今後の展開と社会心理学研究への示唆について話題を提供していただく。大坪先生は進化ゲーム理論の一領域であるシグナリング・ゲームが自己呈示などの対人行動と社会的認知をつなぐ共進化の理論であることを示し、この視点から具体的にどのような研究が可能かについて話題を提供していただく。熊谷先生は、集団間葛藤研究を通じて浮き彫りになった社会心理学の問題点を指摘し、その克服が今後の日本の社会心理学の発展につながる可能性について論じていただく。

上記の話題提供を受けて、今回の指定討論には、主にインターネット上での人間のインテラクションやコミュニケーションにかかる現象に焦点を当て、精力的に研究に取り組んでおられる関西学院大学の三浦先生にご登壇いただくことにした。

今回のシンポジウムは、大会準備委員会と相談のうえ、社会心理学会の中に新設された大会運営委員会が企画した。企画に当たっては、若い世代の研究者を知るために、学会内の多方面の研究者の方に、研究領域を絞らずに話題提供者として適任の方を推薦していただいた。推薦された方々について研究内容等を委員会で検討させていただき、最終的には委員長の村田光二の責任で依頼と調整を行って話題提供者を決定させていただいた。ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。会員の皆様からは、こういった企画のあり方について何かの機会にご意見をいただけると幸いです。

## 特別企画シンポジウム

第2日目 (9月18日)

14:00~16:00 L205

### 日本社会における「助ける」、「助けられる」、「助け合う」ということの社会的意義は?

企 画 者	高木 修	関西大学社会学部
司 会 者	田中 優	大妻女子大学人間関係学部
話題提供者	松浦 均	三重大学教育学部
話題提供者	太田 仁	梅花女子大学心理こども学部
話題提供者	小榑 雅章	向社会性研究所
指定討論者	松井 豊	筑波大学人間総合科学研究科

#### 概要

援助行動研究は、1964年のKitty Genovese嬢殺害事件を契機に、どのような人が、どのような時に、人を「助ける」のかという、援助者を中心に据えた研究から始まった。その後、焦点を被援助者に据え替え、どのような人が、どのような時に、自ら求めて「助けられる」のか、さらには、援助者と被援助者の両者を同時に視点に収め、どのような人たちが、どのような時に、「助け合う」のかについて、研究が行われてきた。研究知見が蓄積され、多くのことが解明されてきたが、昨今の日本社会やそこにおける対人関係の様相は、今までにはないほど多様で、複雑になっている。そこで、過去、現在、未来の日本社会を展望し、「助ける」、「助けられる」、「助け合う」ことの社会的意義について議論したい。

このシンポジウムでは、視点やアプローチを異にする3人の援助行動研究者から話題提供していただく。

まず、松浦均先生には、日常生活において「助けられる側は本当に助けられているのか」という点に注目して、被援助者にとって「助けられることの意味」について話題提供していただく。次に、太田仁先生からは、教育現場や臨床的地域援助場面における援助要請、援助授与、援助受容の関連性を通じて、援助行動のプロセスと対人関係に及ぼす影響について話題提供していただく。最後に、小榑雅章先生からは、市民が助け合って社会を変えていこうとする向社会的な活動の中での企業の社会的責任について欧米と日本の意識の違いなどを紹介いただき、日本人の「自己の利益に執着する利己的行動」等について話題提供していただく。

これらの話題提供を受けて、松井豊先生には、指定討論者として、「助ける」、「助けられる」、「助け合う」ということの光と陰、特にダークサイドの側面について問題指摘していただき、話題提供者と共に、フロアからの参加をも期待しながら、議論を深めたい。

このシンポジウムは、社会心理学の会員に加えて、認定心理士等を含む一般市民の参加も可能な公開シンポジウムである。日々の生活の中で一般市民の方々が経験し、疑問を感じて指摘される「生の」援助関連問題が、あらたな研究・実践課題として、これから社会心理学の取り組みをますます現実化することに貢献できれば幸いである。

## ワークショップ1

第1日目 (9月17日)

10:00~11:30 K104

### 自己制御研究の最前線 一人はいかにして困難を乗り越えて目標達成するか—

企画者	尾崎 由佳	東海大学
企画者	樋口 収	一橋大学大学院
話題提供者	渡邊 さおり	一橋大学大学院
話題提供者	竹橋 洋毅	名古屋大学
話題提供者	樋口 収	一橋大学大学院
話題提供者	尾崎 由佳	東海大学
指定討論者	唐沢 穂	名古屋大学

## 概要

人間は目標達成のために自らの行動・思考・感情などをコントロールする心の仕組み、すなわち自己制御システムを備えている。この自己制御システムが巧妙に機能するからこそ、目標に向かって前進することが可能になる。ただし、私たちは常にスムーズに目標を達成できるわけではない。ときには、いくつかの目標の間で葛藤が生じたり、誘惑に出会ってしまったり、思わぬアクシデントに見舞われたりなど、さまざまな障壁が立ちふさがる。人間は、いかにしてこれらの障壁を乗り越えるのだろうか。近年、特に欧米諸国では、この問題に対して高い研究関心が集まっている。その結果として、目標追求にともなう困難や障害に対処するための心理的メカニズムが急速に解明されつつあり、新たな発見が続々と報告されるようになった。本ワークショップでは、この最先端の研究課題に取り組む若手研究者が話題提供を行い、海外における研究動向を紹介するとともに、自身の最新の研究成果について解説する。渡邊は、個人的目標と対人的目標が葛藤するような場面においてどのような自己制御がなされるかについて論じる。竹橋は、複数の目標間での制御資源の配分が動機づけ要因によって調整されるプロセスについて議論する。樋口は、目標達成を阻害する誘惑が存在するときにいかにして対処するかという観点から、目標の活性化にともなって誘惑物に対する認知的・感情的評価が戦略的に調節されることを報告する。尾崎は、自己に対する評価の戦略的な調節にフォーカスし、目標追求に対する動機づけを高め達成行動を持続させるために、自己評価や自尊心が高められたり、逆に低められたりすることについて議論する。指定討論では唐沢が各研究の位置づけや意義、そして今後の発展可能性などについて指摘し、フロアを交えての意見交換を行う。日本国内における自己制御研究に対する関心度は、現在のところ欧米諸国と比べてまだ低いと言わざるを得ない。このワークショップをきっかけとして、この研究テーマの魅力と将来性を伝えることにより、今後の研究発展を促進するための一助としたい。

## ワークショップ2

第1日目 (9月17日)

10:00~11:30 K203

**恋愛研究の新たな視点  
—現代社会の恋愛への現象ベースのアプローチ—**

企画者	若尾 良徳	浜松学院大学現代コミュニケーション学部
企画者	天野 陽一	首都大学東京都市教養学部
司会者	若尾 良徳	浜松学院大学現代コミュニケーション学部
話題提供者	立脇 洋介	大学入試センター
話題提供者	天野 陽一	首都大学東京都市教養学部
話題提供者	若尾 良徳	浜松学院大学現代コミュニケーション学部
指定討論者	谷口 淳一	帝塚山大学心理福祉学部
指定討論者	松井 豊	筑波大学大学院総合人間科学研究科

## 概要

現代社会の若者において、恋愛や性は非常に大きな関心の対象になっており、生活の様々な側面で影響を及ぼしている。現代の社会や若者を理解するうえで、恋愛や性の問題を抜きに語ることはできないだろう。

社会心理学をはじめとして心理学においては、これまで恋愛や性に関して多くの研究がなされてきた。それらの多くは、進化論やアタッチメント理論、社会的交換理論、対人魅力理論などの諸理論に基づき、恋愛や性の普遍的な側面を解明してきた。しかし、現代の恋愛や性に関する問題は、時代や文化を越えた普遍的な側面だけで説明できるものではない。現代の若者に特有の問題についても、分析、理解をしていく必要があろう。すなわち、現代社会の若者の恋愛を理解するためには、恋愛や性についての現代的な問題について、理論ベースのアプローチではなく、現象ベース、問題ベースのアプローチをとり、直接的にアプローチをすることが重要であろう。

以上の問題意識から、本ワークショップにおいては、現代の日本の若者における恋愛の諸問題を取り上げ、心理学の立場からどのようなアプローチが可能であるかを議論したい。

話題提供として、立脇氏には、流行歌の歌詞の内容の変遷から現代社会の恋愛の価値や位置づけについて論じていただく。次に、天野は、「彼女いない歴」、「彼氏いない歴」といった言葉に表されるような、恋人がいる期間、いない期間である“交際周期”に関する意識に注目した研究を紹介する。最後に、若尾は、「恋愛」ができない悩みという問題から、恋愛格差ともいえる現代の恋愛状況の問題について論じる。

指定討論として、谷口氏からは、若手の恋愛研究者の代表としてコメントをいただきたい。松井氏からは、日本の恋愛研究の第一人者の立場から、心理学における恋愛研究を見通したコメントをいただきたい。

本ワークショップにおいては、これまで扱われてこなかった視点の研究から、恋愛研究の新しい切り口を探りたい。フロアの方とも議論をしていき、恋愛研究の可能性について探っていきたい。

## ワークショップ3

第1日目 (9月17日)

16:00~17:30 K104

### 心理学における統計教育のあり方

企画者	吉田 寿夫	関西学院大学社会学部
企画者	村井 潤一郎	文京学院大学人間学部
話題提供者	吉田 寿夫	関西学院大学社会学部
指定討論者	唐沢 かおり	東京大学人文社会系研究科
指定討論者	村井 潤一郎	文京学院大学人間学部

#### 概要

企画者の1人である吉田は、これまで、10前後の大学の大学院生らを対象として、統計に関する抜き打ちテストを2回実施した。その問題の多くは、研究者になることを目指している大学院生にとっては基本的事項だと考えられる事柄に関するものであったが、残念ながら、結果は実施者の予想をはるかに越えた（下回る）ものであった。そして、結果から、型にはまったことが機械的に行なえるようになるための手続き的な事柄の修得にウェイトが置かれすぎていて、種々の分析法の意味に関する基礎的なことについての教育・学習が極めておろそかになっているであろうことや、そのことが、研究法の力の過大視を生じさせ、実際の研究において過度の論理的飛躍を伴う不当な結果の一人歩きが横行している一因になっているのではないか、といったことなどが推察された。また、分散分析、単回帰分析、共分散分析、偏相関分析、重回帰分析などについての基本的事項に関する問題に正答するための基礎的知識を身につけずに共分散構造分析などを使っている（または、使おうとしている）人たちが多いであろうことに、今さらながら、強い危惧を覚えた。

以上のような憂すべき現状と、我が国の社会心理学会においては、これまで、統計教育のあり方といった問題がほとんど議論されてこなかったであろうことを鑑み、本ワークショップを開催したいと考えた。

当日は、まず吉田が、これまでに自身が試行錯誤的に行なってきた実践に基づいて、多くの具体例を交えながら、統計教育の目標と「What & How」に関する私見を述べる。そして、2人の指定討論者から忌憚のないコメントをいただいた後、時間の許す範囲で、自由な討論ができればと考えている。

## ワークショップ4

第1日目（9月17日）

16:00~17:30 K203

**社会的アイデンティティ・アプローチに未来はあるのか？**  
**—今後の集団研究の価値を問う—**

企画者	尾関 美喜	金沢大学大学教育開発・支援センター
企画者	中島 健一郎	長崎女子短期大学幼児教育学科
司会者	中島 健一郎	長崎女子短期大学幼児教育学科
話題提供者	三船 恒裕	北海道大学大学院文学研究科
話題提供者	中島 健一郎	長崎女子短期大学幼児教育学科
話題提供者	尾関 美喜	金沢大学大学教育開発・支援センター
指定討論者	結城 雅樹	北海道大学
指定討論者	村本 由紀子	横浜国立大学

**概要**

本企画では、集団内・集団間ダイナミズムにおける人間の心理と行動傾向を明らかにするために、3名の若手研究者が用いている、異なるかつ新しい研究アプローチを紹介することを通して、集団研究の新たな展開可能性を議論したい。

まず、「適応論的アプローチ」によって集団間文脈（内集団と外集団が存在する状況）における人間の心理傾向を明らかにしようとする三船恒裕から話題提供を行う。ここではまず、これまでの集団研究の流れを簡単に紹介し、現在でも社会的アイデンティティ理論（SIT）が集団行動の理解に重要な理論的意義を持っていることを紹介する。その上で、SITの理論的基盤となり、他の理論との比較優位性を示している点で重要な知見である、最小条件集団における内集団ひいき行動が、実はSITでは説明できないことを示す一連の研究を紹介する。そしてそれら一連の研究結果が、最小条件集団における内集団ひいき行動が集団内の間接互恵性への適応行動として理解可能であることを説明する。これらを踏まえ、集団行動における適応論的アプローチの有用性に関して議論する。

次に、中島健一郎より、個人-対人-集団-社会-文化レベルの要因の相互影響過程の観点から内集団アイデンティティの変動を捉える「重層的アプローチ」の有用性に関する話題提供を行う。これまでの集団研究では、集団内相互作用や集団間文脈の顕現化といった多くの内集団アイデンティティの規定因が明らかにされている。しかしながら、これらの要因が同時に存在している日常場面に着目した場合、「各々の要因がいかに関わり合いながら内集団アイデンティティの変動を規定するのか」という問い合わせることはその変動を理解する上で重要な意味を持つ。これを可能にするのが重層的アプローチである。今回は主に文化的自己観・課題/対人関連ストレス・内集団の社会的価値といった要因に着目し、人が自己を安定的かつ適応的に維持するための手段として内集団アイデンティティを用いることを明らかにした研究を紹介する。

3人目の話題提供者を務める尾関美喜は、近年脚光を浴びているマルチレベル分析を用いて、個々人の認知する集団現象と実際の集団現象を弁別し、これらの間には乖離が存在することを明らかにしてきた。そして集団アイデンティティをマルチレベルでとらえることで、成員性と誇りの2つの下位概念の相違のみならず、成員性にもレベル間でその機能に相違がみられる可能性を示唆してきた。今回は、これまでの知見を踏まえ、内集団アイデンティティを個人レベル/集団レベルのマルチレベルでとらえ、個々の成員が集団アイデンティティを形成する過程を通じて、集団が集団らしくなる過程をマルチレベルで描く、新たな集団形成過程モデルを提唱する。

最後に指定討論者の結城先生と村本先生より、3名の話題提供者による研究を通して、これらのアプローチから考えられる、集団研究の今後の展開や可能性についての示唆を提供していただく予定である。

本企画では、集団そのものを扱う研究、集団状況における人間の行動や心理に关心のある研究者の積極的な参加と活発な議論を期待している。

## ワークショップ 5

第2日目 (9月18日)

9:15~10:45 K102

### 社会心理学方法論の再検討パート6 —さらに面白い社会心理学のアプローチと方法論を求めて—

企画者	山口 裕幸	九州大学
企画者	唐沢 かおり	東京大学
話題提供者	戸田山 和久	名古屋大学
話題提供者	唐沢 かおり	東京大学
話題提供者	山口 裕幸	九州大学
指定討論者	浦 光博	広島大学
指定討論者	竹村 和久	早稲田大学

**概要**

社会心理学への関心は着実に高まっているように思われる。研究テーマが、身近でアリティーを構築しやすいものが多く、大学で学ぶ学生達の関心を集めやすい側面があることは大きな理由であろう。また、効果的な教育や福祉のありかた、行政や法の制定と執行のあり方、組織経営のあり方、効果的なサービスのあり方、民衆の理解を得るコミュニケーションのあり方等々、社会生活を豊かにしていくための実践的な取り組みを行う人々から、社会心理学の知見に期待する声も高まっている。

多くの期待を集めている一方で、その研究方法に関しては、まだまだ工夫の余地があると認めざるをえない。実験社会心理学は、現実の社会場面を問題として提起しておきながら、人工的な一時的な場面設定のもとでの人間行動と心理を測定しているに過ぎないのではないかという、疑問・批判に晒され続けてきた。また、倫理的な側面からの批判も受けてきた。質問紙調査法に関しても、どれほど人間心理の本質を測定し得ているのか、という疑問・批判を受けてきた。もちろん、それら批判への反論を、社会心理学者は行ってきた。研究知見の特性に関する理解を得るために論理的に反論することは大事である。ただし、それだけではなく、それと併せて、もっと方法論的な工夫も考えてみたい。そうした観点から、このワークショップを企画した。

話題提供をいただく唐沢かおり氏には、社会心理学の方法論的問題点に関して、いわば自虐的な反省を込めて、論点の整理を行っていただく。また、山口は、もがきつつ実践している最新の測定ツールを使った行動観察をベースとする研究を紹介しつつ、集団研究における社会心理学的方法の問題点と新たな突破口について話題を展開する。そして、科学哲学者である戸田山氏には、社会心理学の研究アプローチと方法論をより客観的にとらえ、今後、社会心理学研究を実践するうえで、検討すべき課題について論じていただく。浦氏と竹村氏の指定討論を発火点に、フロアの参加者との意見交換を行って刺激的な Multidisciplinary な議論を展開できればと考えている。

## ワークショップ 6

第2日目 (9月18日)

9:15~10:45 K104

### 研究知見の社会還元はどうあるべきか? — “社会と社会心理学” の微妙な関係 —

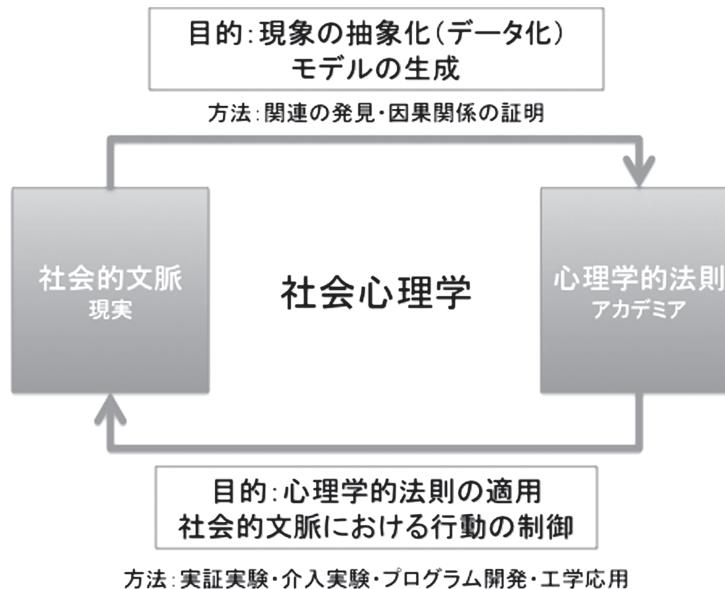
企画者	平井 啓	大阪大学
企画者	三浦 麻子	関西学院大学
司会者	平井 啓	大阪大学
話題提供者	平井 啓	大阪大学
話題提供者	三浦 麻子	関西学院大学
指定討論者	西田 公昭	静岡県立大学
指定討論者	藤島 喜嗣	昭和女子大学

## 概要

社会心理学は、社会的文脈における人間の心理・行動について実証的な心理学的法則を解明する事を目的としている。このため現代の社会心理学者の多くは、社会的文脈からのデータ収集とその理論化を中心として活動している。一方で、社会心理学の外から視点では、社会心理学によって創り出された心理学的法則がどのように社会的文脈に還元されるのかに关心が持たれている(図)。近年のこうした流れの根幹は、社会心理学にかぎらず科学技術やアカデミア全体が、社会から説明責任や社会還元といったものを要求されていることと共通している。

本来、科学とは、現実に起こっている現象を抽象化し、そこから法則を発見することを旨としている。社会への還元とは、発見した法則を現実の世界へ適用し、なんからの変化を生じさせるという円環を完成させる営みである(図)。これに對して社会心理学として、社会からの要求に十分に答える、あるいは先に述べた円環を完成させる研究成果を示すためには何ができるだろうか?

そこで、本 WS では、社会心理学から社会への働きかけの戦略を作り上げるディスカッションの場を設定する。そのための資料として、まず、現在の社会心理学の分野で行われている研究の全体像を把握するために主要誌に掲載された論文をテーマと方法論の観点からレビューし、その結果を報告する。さらに図の円環の下段にあたる法則の適用の部分について、そのるべき方向性を探索するため、他分野から求められる社会心理学研究とは何かについて調査を実施し、その結果を報告する。これら 2つの資料をたたき台として、指定討論者の二人にはそれ實際に社会問題に関わっている立場から、実験室実験を主に用いている立場からの批判をお願いする。最終的に、社会心理学から社会への働きかけのあるべき姿について、参加者全員によるブレーンストーミングを行い、戦略案をまとめてみたい。



## ワークショップ7

第2日目 (9月18日)

9:15~10:45 K203

### 社会的意思決定の生物学的基盤（1） —社会性・精神疾患・発達障害—

企画者	高岸 治人	北海道大学大学院文学研究科・日本学術振興会
企画者	高橋 泰城	北海道大学大学院文学研究科
司会者	高橋 泰城	北海道大学大学院文学研究科
話題提供者	山末 英典	東京大学医学部精神神経科（非会員）
話題提供者	豊巻 敦人	北海道大学大学院医学研究科（非会員）
話題提供者	高岸 治人	北海道大学大学院文学研究科・日本学術振興会
指定討論者	村井 俊哉	京都大学大学院医学研究科（非会員）
指定討論者	渡部 幹	早稲田大学高等研究所

**概要**

昨年度の本学会で開かれた「社会的意思決定の神経経済学」に引き続き、本年度は精神疾患・発達障害に注目をあて、うつ病・統合失調症・自閉症が社会的意思決定に与える影響を検討する。これら精神疾患・発達障害は社会適応に重要な影響を与えておりことは臨床的知見によれば明らかではあるが、社会的意思決定研究においてはまだ研究が始まったばかりである。本ワークショップで議論する点は、①社会的意思決定研究において精神疾患・発達障害を対象とした研究をする意義と、②精神医学領域において社会的意思決定の研究をする（手法を取り入れる）意義の2点である。精神医学・社会心理学を専門とする研究者に話題を提供していただくとともに、指定討論者として精神科医であり社会性に関する脳画像研究などを行っている村井俊哉教授、社会心理学者であり人々の利他性に関する研究を行っている渡部幹准教授をお招きし上記の2つのテーマに関する議論を行う。各話題提供者による発表内容は以下のとおりである。

**山末英典（東京大学医学部精神神経科）**

自閉症は代表的な広汎性発達障害であり、表情・視線・声など対人コミュニケーションにおける非言語的な情報処理の障害に基づくと思われる社会性の障害を中核症状とする。そしてこの社会性の障害のために、平均以上の知能を有しながら社会適応に破綻を来たしている例も少なくない。話題提供者らは、MRIを用いてこの社会性の障害の脳基盤の解明を目指した研究を行っている。特に、自閉症の社会性の障害と社会的行動の男女差に共通する脳基盤さらには分子・遺伝的基盤に着目して研究を行っており、これについての話題提供をしたい。

**豊巻敦人（北海道大学大学院医学研究科）**

統合失調症は妄想・幻覚が現れる代表的な精神疾患であるが、診断概念の確立に貢献したクレペリンは意志（volition）の障害であるとも記述している。我々は妄想・幻覚の基本障害である自己制御感（sense of agency）に注目し、自己と他人による意志決定の結果が被験者自身に帰属する場合の行動選択過程や結果の評価過程の神経活動を検討した。自己制御感の異常がある患者群では自己による意志決定において健常者で見られる左前頭部の賦活が低下しており、異常な評価的処理に寄与することが分かった。

**高岸治人（北海道大学大学院文学研究科）**

うつ病は抑うつ気分・興味・喜びの喪失を主症状とする精神疾患である。うつ病の成因は未だ不明な点が多いが、脳内セロトニン濃度の低下という神経伝達物質の代謝異常がその一つと考えられている。本研究では、大うつ病患者を対象とし、不公平な分配に直面した際の行動反応を測定した。また相手のお金を減らすことができる状況（ultimatum game）と相手のお金を減らすことができない状況（impunity game）における行動の比較を行うことで、不公平な分配を嫌う傾向と、相手のお金を減らしたいという動機に対して、うつ病がどのような影響を与えているかを報告する。

## ワークショップ8

第2日目 (9月18日)

11:00~12:30 K104

**矯正施設と社会心理  
—受刑者の社会的受容をめぐる諸問題—**

企画者	上瀬 由美子	立正大学
司会者	上瀬 由美子	立正大学
話題提供者	斎藤 実	弁護士・國學院大學（非会員）
話題提供者	高橋 尚也	立正大学
話題提供者	今在 慶一朗	北海道教育大学
指定討論者	矢野 恵美	琉球大学（非会員）
指定討論者	浦 光博	広島大学

## 概要

近年、日本の矯正施設がおかれた状況は大きく変化し、犯罪に対する厳罰化・量刑の重罰化傾向と被収容者数の増加、過剰収容と職員の負担増、人権保護意識の高まり、出所後の自立更生の難しさなど、様々な問題が指摘されている。また、2002年の名古屋刑務所暴行死傷事件を発端として、運営の透明性に対する社会的要請も高まっている。これら様々な問題をふまえ、国による行刑運営に関する見直しが、現在活発化している。矯正施設の在り方の変化は、被収容者や関連職員の意識を変えるだけでなく、一般の人々の矯正施設に対する考え方、地域社会の在り方、そして受刑者の出所後の社会復帰の形へも影響を及ぼすと考えられる。これまで、日本の矯正施設に関連した社会心理学的な研究は、理論研究の面から結果が語られ、知見が社会的にどのような意味をもつのかが十分に議論されてこなかった。しかしながら、今後の矯正施設の在り方を考えるうえで、刑事法研究者あるいは矯正の現場とともに社会心理学的な研究知見を共有することが重要と考える。

上記の問題をふまえ、本ワークショップでは2007年に発足した官民協働（PFI: Private Finance Initiative）刑務所に注目する。PFI刑務所では、施設の警備、収容監視、職業訓練の一部を民間に委託し、官と民が協働で運営を実施している。PFI刑務所の発足は、国と地方のダイナミクス、矯正施設や受刑者に対する人々の社会的態度、受刑者の社会復帰など、様々な側面に影響を及ぼすと考えられる。ここでは、まず弁護士・刑事法研究者の視点から日本におけるPFI刑務所発足の背景・現状を概説し、問題点を指摘していただく（斎藤実先生）。続いて、「美祢社会復帰促進センター」付近住民の意識調査をもとに、PFI刑務所や受刑者に対する社会的受容の現状を報告していただく（高橋尚也先生）。さらに、「喜連川社会復帰促進センター」の受刑者について行った調査結果から、PFIという施設形態が受刑者の更生意識に与える影響についてお話しいただく（今在慶一朗先生）。これらの話題をふまえ、刑事法研究者の立場から矢野恵美先生に、社会心理研究者の立場から浦光博先生に、社会心理学的研究知見の意味と問題点についてご指摘いただき、全体として議論を行いたい。

## ワークショップ9

第2日目 (9月18日)

11:00~12:30 K203

### 社会行動と内分泌系

企画者	犬飼 佳吾	北海道大学経済学研究科
企画者	品田 瑞穂	北海道大学社会科学実験研究センター
司会者	犬飼 佳吾	北海道大学経済学研究科
司会者	品田 瑞穂	北海道大学社会科学実験研究センター
話題提供者	坂口 菊恵	東京大学教養学部
話題提供者	高橋 泰城	北海道大学文学研究科
話題提供者	清成 透子	青山学院大学社会情報学部
指定討論者	亀田 達也	北海道大学文学研究科
指定討論者	高橋 英彦	玉川大学・(独)放射線医学総合研究所 (非会員)

#### 概要

近年、人々の社会性に関する進化的・生物学的意思決定基盤の解明を目指す研究が社会心理学の諸周辺領域において高い関心を集め、数々の新たな研究が展開されている。とりわけ人間・社会科学における神経科学の導入の動きは、昨年度の本大会で脳神経科学と社会心理学とのコラボレーションの可能性が企画シンポジウムとして議論されたように、社会心理学にもその影響を及ぼしつつある。このような潮流の中で、人間の生物学的機序の一つである神経内分泌メカニズムと、人の心理・社会行動との関係を解き明かそうとする研究も注目を集めており、協力行動や攻撃行動、性行動、リスクの下での意思決定など多様な領域にわたる社会行動が研究対象として扱われている。しかし、心理・行動神経内分泌メカニズムそれ自体が未知の部分が多い領域であることから、知見間の整合性や測定の正確性、複雑な人間の社会行動への適用の是非についてはしばしば俎上に載せられる。このような背景から、本ワークショップでは、若手研究者が神経内分泌と人間の社会行動の関係について研究報告を行い、この新たな手法がもたらすメリットとデメリットについて議論する。また、社会心理学と神経科学を専門とする指定討論者とフロアからの参加者とともに、社会行動と神経科学とのかかわりについて、今後の研究の展望を議論する。

## ワークショップ 10

第2日目 (9月18日)

14:00~15:30 K104

**「モノ」の意味を問い合わせる  
—なぜ人はモノを所有・消費するのか—**

企画者	秋山 学	神戸学院大学人文学部
企画者	池内 裕美	関西大学社会学部
企画者	前田 洋光	神戸親和女子大学発達教育学部
司会者	前田 洋光	神戸親和女子大学発達教育学部
話題提供者	川浦 康至	東京経済大学コミュニケーション学部
話題提供者	牧野 圭子	成城大学文芸学部
話題提供者	池内 裕美	関西大学社会学部
指定討論者	秋山 学	神戸学院大学人文学部

## 概要

1980年代のバブル絶頂期、日本においても「消費社会論」が流行し、社会学では主に記号論的視点からモノ(物)やブランド品の意味・機能を考察する研究が数多く見られた。それに対し社会心理学では、「人」に関する研究に主眼がおかれてきたため「モノ」に焦点が当てられることは非常に稀であり、むしろ軽視されてきた感さえ否めない。これは、一つに人的環境と物的環境が切り離されて捉えられてきたことに原因があると思われる。しかし、モノは私たちが生活を営むためだけにあるのではなく、対人関係を築いたり、自己を語ったりする上で欠かせない存在でもある。例えば、近年の対人的コミュニケーションの様相にみる劇的な変化は、携帯電話やコンピュータなどの通信機器に触れずして語れないであろうし、また日常の些細な心理的变化は「モノ」を介して生じることも少なくないであろう。さらに、古くはJames (1890) が唱えた「物質的自己」の概念が示唆するように、私たちが所有するモノの総体は、文字通り私たち自身を“モノ語る”ものとなっている。

本ワークショップでは、こうした私たちにとって非常に身近で重要な存在である「モノ」、すなわち「所有物」に焦点を当てる。そして「モノとは何か」「我々はなぜモノを所有するのか」などモノに関する根本的な問題をあらためて問い合わせし、社会心理学におけるモノ研究の可能性と問題点について、話題提供者やオーディエンスの方々と自由なディスカッションを試みたい。その際、なぜ「モノ」を買い、どのように使用し、廃棄するのかといった“消費”という視点からの切り口も積極的に交えていく。古くして新しい本テーマは、2009年にCsikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981) の名著「The Meaning of Things」の翻訳本が刊行されたこともあり、非常にタイムリーといえるであろう。具体的には、上記書物の翻訳者の一人である川浦先生から「社会関係の中で育まれるモノの意味：自己と他者の力学」について、牧野先生から「広い意味での“美的な(感性的な)モノ”的所有・消費が持つ意味」について、また池内先生から「アニミズム的思考にみる日本人のモノ観」についてそれぞれ話題を提供して頂く予定である。

## ワークショップ 11

第2日目 (9月18日)

14:00~15:30 K203

### 解釈レベルと社会的判断プロセスとの関連 —私たちはどのように「現実」や「想像」を扱っているのか—

企画者	原島 雅之	千葉大学地域観光創造センター
司会者	原島 雅之	千葉大学地域観光創造センター
話題提供者	樋口 収	一橋大学大学院社会学研究科
話題提供者	原田 知佳	名古屋大学・日本学術振興会
話題提供者	原島 雅之	千葉大学地域観光創造センター
指定討論者	北村 英哉	東洋大学社会学部

**概要**

私たち人間は、自分がいま直面している問題ばかりでなく、それ以外のさまざまな問題についても考えることができる。例えば、自分が将来何をしているかといった時間的に離れたことや、故郷にいる両親のことといった空間的に離れたことなどをしばしば想像する。近年提唱された解釈レベル理論 (e.g., Liberman & Trope, 2008) によれば、いまのことについて考える場合と、そうではなく心理的（時間的・空間的）に離れたことについて考える場合とでは、社会的判断におけるプロセスが異なるとの主張がなされている。簡単にまとめると、いまのことについて考える場合には、経験情報などを利用しながら具体的に考える一方で、心理的に離れたことについて考える場合には、経験情報などが利用できないため抽象的に考えるのだとしている。

本企画では、このような考える際の抽象度が我々の認知・感情・行動に及ぼす影響について、3名の話題提供者からの報告をもとに議論する。樋口は、心理的距離に応じて、社会的判断で利用される情報の抽象度が異なることについて報告を行う。原田は、心理的距離だけではなく、マインドセットによっても思考する際の抽象度が変わり、それが社会的場面における自己制御に及ぼす影響について報告する。そして、原島は上記の議論などに加え、思考する際の抽象度における個人差の可能性についての報告を行う。

そして以上のような報告を踏まえ、指定討論の北村先生には社会的認知研究の文脈からコメントいただき、さらにフロアとの質疑応答を通して、我々が思考する際の抽象度に着目する意義などについて議論を深めたい。

## Special Workshop

第2日目 (9月18日)

11:00~13:00 L205

### Group violence and conflict resolution: A terror management perspective (集団間葛藤とその解決：存在脅威管理理論の視点から)

企画者	脇本 竜太郎	安田女子大学文学部
司会者	脇本 竜太郎	安田女子大学文学部
発表者	Mordecai G. Sheftall	静岡大学情報学部（非会員）
発表者	脇本 竜太郎	安田女子大学文学部
発表者	Thomas Pyszczynski	University of Colorado at Colorado Springs, Psychology（非会員）
指定討論者	熊谷 智博	大妻女子大学文学部

## 概要

社会心理学領域では、集団間葛藤の原因やメカニズムを理解する取り組みが行われてきた。存在脅威管理理論は、そのような取り組みの枠組みとして近年特に注目されている。当該理論は、文化的世界観とそれへの適合感（広義の自尊心）を、存在論的恐怖（死の不可避性の認識に基づく恐怖）を緩衝する心的装置と捉える。当該理論では、人間が死の恐怖を低減するために内集団と外集団の区別、さらに外集団の排斥に動機づけられ、その帰結として集団間葛藤が生じると考える。これは、文化的世界観の妥当性が社会的合意のみによって担保され、異なる世界観の支持者は妥当性への脅威となるからである。実際に、存在論的恐怖が顕現化する状況において、外集団メンバーに対する否定的評価や攻撃性が高まることが示されている。

このような否定的な影響に関する研究が行われる一方で、存在論的恐怖の肯定的な影響を捉える必要性が指摘され、その成果が蓄積されつつある。本シンポジウムでは、これら存在脅威管理理論研究の新しい展開を含めた議論を通して、集団間対立の理解と解決について考えたい。

Sheftall氏は、近現代日本史、特に第二次世界大戦期の日本人のアイデンティティに関する研究を行っている。今回は“Imperial Era Japanese Militarism and the ‘Kamikaze Ethos’: A TMT Perspective”という題目で、旧大日本帝国軍が特攻という悲劇的事態を招くに至った背景と過程を、存在脅威管理理論の観点から歴史的に分析する。

脇本氏は“An Alternative: Terror Management Through Interpersonal Connectedness”という題目で、存在論的恐怖が対人関係に及ぼす肯定的な影響を検討した研究について報告する。そして、文化的不安緩衝装置の交換可能性という点から、集団間葛藤の低減への示唆について論じる。

存在脅威管理理論の提唱者の1人でもある Pyszczynski氏は“A Terror Management Theory on the Conflict in the Middle East: Understanding Forces the Promote War and Peace”という題目で、中東問題に関連して行った一連の研究について報告する。当該研究では、人種や民族を超えた絆が意識されるような状況下では、存在論的恐怖が集団間葛藤の解決に寄与する反応を生ぜしめることが示されている。

熊谷氏は、集団間葛藤研究の立場からこれら研究の可能性と今後検討すべき課題について指定討論を行う。